



Title	中国民国期における谷崎潤一郎作品の受容状況
Author(s)	金, 晶
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58299
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【9】			
氏 名	キン	ショウ	晶
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）		
学 位 記 番 号	第 2 4 7 8 7 号		
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻		
学 位 論 文 名	中国民国期における谷崎潤一郎作品の受容状況		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 青野 繁治 (副査) 教 授 渡辺 克昭 准教授 今泉 秀人 准教授 高階 早苗 准教授 五之治昌比呂		

論 文 内 容 の 要 旨

谷崎潤一郎は中国と深い関わりをもつ作家の一人である。彼は1918年第一回目の中国旅行後に中国を舞台とした、「西湖の月」、「鶴唳」など「支那趣味」溢れる作品を数多く描いた。さらに、1926年の第二回旅行を契機として、田漢、郭沫若、欧陽予倩などといった中国の文学者、演劇家とも親交を持った。民国期の中国において、日本耽美派の先駆者として、また「腐りきった」資本主義文学の代表者として批判の対象であり、また時には、田漢のよき友として、中国の文壇・読者たちに知られているこの作家は、時代の移り変わりによって、異なる評価のもとに読まれたのであった。中国での谷崎潤一郎のこうした波瀾万丈の受容史は、或る意味で目まぐるしい近代中日関係の証言としてとらえられると同時に、文学者たちの異彩に富んだ文学活動とも深く関わっていると考えられる。民国期の中国の翻訳者たちは、なぜ谷崎を選び、どのように作品を選択し、その作品の中に何を読み取り、翻訳により、何を伝えようとしたのか。そして、それら翻訳作品を通じて、谷崎の、あるいは近代日本の何が中国に受け入れられ、何が受け入れられなかったのか、それらを解明することが、本論文の目的である。

谷崎作品を考察する際、その文学の趣向や主題はいずれも「世紀末」文芸の諸相から見出せる。一方で、民国期における谷崎文学の受容は20年代の「世紀末」ブームを背景に行われた。そこで、第一章の第一節では、西欧「世紀末」文芸思潮の生れる背景と特徴について論じた。高度の物質文明や進化論などに代表される中産階級の価値基準へのアンチテーゼとして生まれた「世紀末」文芸の特徴は美術、文学、音楽など芸術の各ジャンルにおける相互作用性・逆説性である。第二節では、日本における「世紀末」文芸受容の全体像を概観した。日清戦争の勝利を経て、物質的な近代化がすすめられた日本は明治40年に至って、「世紀末」思想が文壇に浸透した。自然主義から象徴主義、耽美主義への変遷を考察することによって、その互いに重なりあう関係が見て取れ、ひいては日本の近代文学は「世紀末」思潮というひとつの源から進化してきたことが確認できる。その理由は、文学的主張が異なったというものの、西洋のような近代化への渴望という点で通底している近代文学者たちが、世紀

末を近代性と同一視していたことにあった。第三節では、民国期中国における「世紀末」受容のありさまについて論じた。1910年代後半になると、外国の文学潮流が盛んに紹介され、西欧「世紀末」文芸への関心も高まっていった。しかし、1920年代初頭、半封建社会の下でもがいていた中国は到底「世紀末」文芸を受容する物質的条件がまだ整っておらず、外来思潮の移植過程でズレが生じたと考えられるだろう。たとえば、ワイルドの作品を翻訳する目的には、既成社会への反抗が大きな特徴となり、その強い功利的傾向が見られる。1920年代後半に入ると、物質的な条件が整っていた大都会上海では、「世紀末」思潮を本格的に受け入れる文学者が現れた。その代表者として、章克標と施蛰存があげられる。

第二章の第一節では、谷崎の二回中国旅行が彼の中国観の変遷にいかなる影響を与えたかを論述した。谷崎が第一回旅行から得たロマン的でデカダンの中国像が、第二回旅行で、中国知識人との会話を通して碎かれ、それ以後「支那趣味」作品の創作を断念した。一方で、谷崎は上海を鏡にして、それまで浸っていた日本の西洋模倣の安易さをも再認識した。この意味から見れば、第二回の旅行は、谷崎にとって後の「古典回帰」への重要なステップにもなると考えられる。第二節では民国期における谷崎翻訳作品の目録を作成し、このデータを基礎として翻訳状況の特徴を考察した。1、民国期において、谷崎の24点の作品が翻訳された。1929、1930年の2年間が最盛期である。2、訳本の中では、「麒麟」は訳がもっとも多く、4つの異なるバージョンが存在する。「富美子の脚」も3種類のバージョンがある。3、翻訳作品ジャンルの選定から見ると、「陰翳礼讃」をはじめとする随筆は、逆に随筆というジャンルを重視し愛好した当時の中国文学者から看過されている。4、谷崎作品の訳者として、十数人の訳者の名が挙げられるが、谷崎の作品を最も多く翻訳したのは章克標である。

第三、四、五章は主に受容状況について論じた。第三章では、郁達夫と施蛰存に即して、異常性欲描写における谷崎受容の状況を概観した。第一節では、谷崎文学における異常性欲描写を辿りながら、その背後にあってその動きを方向付けている要素を考察した。その要素としては、当時の「変態性欲」ブームや、ワイルド流行に代表されていた世紀末作家の影響が見られる。また、異常性欲描写が、当時まだ存在しなかった「高尚な恋愛文学」を作り上げるための谷崎の試みでもあったと考えられる。第二節では、郁達夫がなぜ谷崎潤一郎の異常性欲描写を受容したのか、異常性欲描写が彼の文学の中で、どのような位置づけになるかについて論じた。郁達夫は厨川白村経由で異常性欲描写を「世紀末」的なもの、「近代」的な現象として捉えていた。しかし、当時暗黒な中国の現実苦悶していた郁にとっては、異常性欲描写は、一種の飾り的要素であり、主人公たちの苦悶の自我を表象する手段にすぎないといえよう。第三節では、施蛰存作品における異常性欲描写に焦点を当て、谷崎やフロイトから影響されながら、彼が作品を生み出していった様子を跡付けた。本節ではフロイト理論を援用しつつ、施蛰存が異常性欲描写を自らの作品に持ち込んだ理由は、人間精神のより普遍的根本的な性質を追求することにあったということを論述した。

つづく第四章は谷崎作品の女性像と恋愛論の受容を考察した。第一節では、谷崎の「刺青」、「痴人の愛」を取り上げ、それぞれ作品の中で作り上げた女性像の発表当時における女性運動社会史とのかかわりを検証することによって、谷崎文学の先覚性を明らかにした。第二節では、郁達夫の「迷羊」と「痴人の愛」における女性像のジェンダーロールや男女関係の逆転などの共通点を検討することによって、「迷羊」における女性主人公は中国の「モダン・ガール」の原型であることが判明しただけでなく、中日両国の女性が身体性を以て都市空間に進出したことが明らかになった。第三節では、谷崎作品の主要な訳者である章克標の恋愛観における谷崎受容を取り上げた。章克標作品からは、彼が谷崎から影響を受け、それまでの恋愛と結婚を切り離して考えていた大多数の民国期文学者たちとは

一線を画し、性欲、恋愛、結婚という三大テーマがセットとして論じられる恋愛観を自らの作品に持ち込んだことが見て取れる。

最後の第五章では、施蛰存「黄心大師」における「春琴抄」の影響を取り上げ、谷崎作品芸術観の受容状況を考察した。近代小説のあり方を模索し続ける施蛰存は、テキストの重層化と材料の虚構性といった芸術観を受け入れることによって、「黄心大師」という新しい文章世界を構築したといえよう。

結語は以上の議論を受けての総括である。

論文審査の結果の要旨

提出された論文「中国民国時期における谷崎潤一郎作品の受容状況」は、「世紀末」をキーワードに谷崎潤一郎文学の成立を追いつつ、同時代の若い中国人作家たちとの交流、さらに中国語に翻訳されたその作品を通じて、さまざまな中国作家に与えた影響を分析し、論じたものである。

第一章では、「世紀末」芸術に見られるデカダンス、性欲の否定と倒錯、同性愛、近親相姦、サディズム、マゾヒズム、宿命の女といったモチーフが谷崎潤一郎作品のモチーフでもあることを述べる。また同時代に中国でも、「世紀末」の思潮を受け入れた作家たちがいたことが紹介される。

第二章は、谷崎潤一郎と中国の関係をたどり、二度の中国旅行によって、谷崎の中国観に変化が見られること、同時代（中華民国期）における谷崎潤一郎文学が、翻訳や評論を通じて中国に紹介されていたこと、紹介に際して、周作人、田漢、穆儒丐、謝六逸ら日本留学生の果たした役割が大きかったことが指摘され、最も多く谷崎作品を翻訳した上海の耽美主義作家章克標にスポットが当てられている。

第三章は、第一節で谷崎作品にみられる異常性欲描写について、谷崎が若いころ歌舞伎の斬首される人物に共感を抱いたエピソードや「変態心理」への関心、クラフト＝エビングの著作への共感などが紹介され、作品には一貫して異常性欲描写がみられること、しかしまたそれは「高尚な恋愛文学」を作り上げるための谷崎の試みであった、ということが紹介される。それを踏まえ、第二節では、郁達夫の初期作品「茫茫夜」にみられる異常性欲描写と谷崎の「悪魔」の描写との類似性を指摘、郁は厨川白村を通じて谷崎受容の基礎を持っていた、と考察している。さらに第三節では、施蛰存の二作品「石秀」と「在巴黎大戲院」に「悪魔」におけるスカトロロジーおよびサディズムの類似表現があることを指摘、施蛰存が谷崎から異常性欲描写だけでなく、美意識や物語構成にも関心をもち、自作にとりこんだと論じている。

第四章は、「新しい女」と「モダンガール」をキーワードに、「痴人の愛」ナオミの先駆性を指摘、郁達夫の「迷羊」との比較において、二作の女主人公がモダンガールであり、娼妓性を有し、また男女の地位に逆転がある、という共通性を指摘している。一方、章克標は、厨川白村「近代恋愛論」の影響下に、恋愛とセックスと結婚（＝家）をセットにした、旧来とは異なる恋愛観を「結婚的当夜」に描いたが、性的な関係を排除した同居人との出発は、譲治とナオミの関係と同じパターンであると指摘した。

第五章は、谷崎作品の芸術観の受容例として、施蛰存の「黄心大師」と谷崎の「春琴抄」を取り上げる。施蛰存は陸少懿訳「春琴抄」「春琴抄後語」などから触発されて、「黄心大師」を創作した経緯と、谷崎のこの作品における文体上の試みが、施蛰存の「欧化された新文学」ではなく中国の大衆に受け入れられる文体をめざす問題意識と共鳴したことを明らかにし、「黄心大師」はテキストの重層化、材料の虚構性という手法においても「春琴抄」と類似性を示すものとなった。施蛰存は谷崎から学び、「純中国式の白話文で小説を書く」実験を行った、と論ずる。

「結語」は、近代中国において谷崎が多彩に読まれ、深く理解されてきたことは、「貴重な財産」であり、これを受け継ぐことが課題である、と述べる。

本論文は、「世紀末」芸術という背景のなかで、谷崎潤一郎文学を理解し論じるとどまらず、同時代の中国の作家たちに与えた大きな影響を、具体的な作品の表現を一つ一つ丹念にあたるこ

とによって明らかにした、すぐれた論文である。過去において、一人の中国の作家に着目し、夏目漱石など日本を代表する作家と比較し、また影響関係を論じた論文は数多いが、このように、一人の日本人作家が多くの作家に影響を与えた、その状況を、その時代の背景とともに具体的に論じたものはなかったのではないか。その意味で、本論文は独創的である。

また個別の論点においても、過去の研究者が気付かなかった独創的な論点が多くみられ、厨川白村、郁達夫、章克標、施蛰存を論じた部分に特に独創性が発揮されている。

論文の幾つかの章は、すでに学会等で発表されたものに基づいており、それらはいずれも学会誌、研究誌に発表され、一定の評価を得ているものである。

やや日本語表現に、不十分、あるいは不適切な部分が見られるが、それは、論文全体の意義と価値を損なうものではない。

以上のことから、審査委員会は、全員一致で、本論文が博士の学位にふさわしいものであると判断する。